全日本学生ロードレースカップシリーズにおける自己競技分析
～2011 優勝年と 2012 準優勝年の比較～
The analysis of the bicycle road race cup series on top ranking rider

1K10C089　大中巧基
主査 太田章 先生　　副査 矢内利政 先生

【目的】

筆者は全日本学生ロードレースカップシリーズの 2011 年度大会で総合優勝した。しかし 2012 年度大会では総合２位となった。そこで自身が行ってきた自転車競技結果の比較､検討を行うことで 2011 年度の勝因と 2012 年度の敗因を分析し、レースをより効果的または優位に進める手段を提案して学生自転車競技界の競技レベル向上を期待する。また今後の展望を考え、大学間の競技力格差を解消すべく学生競技者が行える年間のトレーニングスケジュールを考案し、効率的なトレーニングを示すことで学生間の競技レベル格差を解消されることを期待するものである。

【方法】

2011 年度に行われた学生ロードレースカップシリーズ全１１戦と 2012 年度に開催された同大会全１３戦の計２４戦に渡る自身の競技結果から学生自転車競技大会のレース展開、特性を調べる。また開催された日時や場所、天候から気温、風雨、環境を考察し勝利に必要とされる要素を検討する。

【結果】

2011 年度は第１戦の総合優勝以来、第４戦お台場ラウンドまでランキング首位を通した。しかし第５戦白馬ラウンドの欠場を機にランキングが低下。好成績が出せないまま冬シーズンに入るが、１２月ラウンドで上級生のアシストを受けランキングが徐々に浮上する。第１０戦菖蒲町ラウンドでついにランキング首位に戻り最終戦明治神宮外苑クリテリウムの入賞で総合優勝となった。

2012 年度は第１戦の第２ステージで優勝するも総合で敗れランキング２位でスタートする。体調不良やメカトラブルが相次ぎランキングは２位から徐々に低下し３位をキープする。第６戦の結果で２位に浮上するも首位との差を詰めることができず総合２位で最終戦を終えた。

【考察】

2011 年度の勝因は年度前半戦でポイントをリードし、２位につけた選手も同じ早稲田の選手であったことは大きい。トップ２の２名が同じ大学であることは、他の大学から２名ともマークしてレース展開を練らねばならず通常各大学１名のエースと、それを支えるアシストから構成されるが、エース格２名からなる早稲田に対する牽制は難しい作戦が強いられたであろう。これに対抗してきた中央大学は、ランキングが３位であった山本選手を中心に展開してきたが、年度終盤に山本選手が体を壊しレース不参加となった為、大きく足並みが崩れた。同様にランキングで僅差にあった明治大学と法政大学だったが､最終戦で入賞することができず逆転はならなかった。また早稲田大学はこの年、強力な選手が揃っておりアシストを行う選手も各大会で優勝するなどしておりチーム全体のレベルが非常に高かったといえる。対して 2012 度の敗因は前年度ランキング２位であった主将の引退により大学から競技を始めたメンバーでチームが構成されたことによる全体のレベル低下、またチーム内での意見の対立やアシストの経験不足が大きく響いたと考えられるほか、明治大学の長距離選手強化、経験の豊富なアシストの保有などでレースをコントロールされた外的な要因も考えられる。もとより自身の競技力の成長が乏しかったとも考えられるが、前年度なかったステージ優勝を果たすなど局所では成果をあげた。しかしそれ以上に 2012 年度総合優勝を果たした明治大学の西沢選手が大きな成長を遂げたことは言うまでもない。

全体を通して 2011 年度は安定感があった｡各レースで常に入賞していた事も含めメンバーが雨天や強風でもアシストをおこなえるだけの実力を持っていた。これは自転車のコントロールや強風での体力温存を経験や知識として有していたかどうかである｡2012 年度のメンバーは大学から競技を始め、知識は教えられても経験はなかった。この点で他大学に劣っていたことは間違いない。これを改善すべくトレーニングの段階でこれまでされてなかったクリテリウムを意識した短い区間でのハイペース走行練習やポイントレースを意識した勾配のある短距離周回コースでの競争を練習メニューに取り込んだ。結果として下級生の実力は向上したためクラス１のメンバーが増えるなどの成果はあった。

これらの結果からアシストを含めメンバー全体が各レースに対応できるトレーニングを年間の初頭に配置し、シーズンオフ中に基礎体力をあげるトレーニングメニューが不可欠であることがわかった。